

◆連載

いま留萌をがし

●スキーマの発祥

北海道のスキーマの歴史は、明治四十一年に農科大学（現北海道大学）に來たスイスマ教師ハンス・コラーが學生に紹介したのが始まりといわれる。しかし、北海道に本當の意味でスキーマを紹介し、その後のスキーマの發展に關つたのはテオドル・エードレル・レルヒという人である。そして、この人が留萌のスキーマの發祥に深く關つていたのである。

レルヒ中佐はアルペンスキーマの父といわれるスダルスキーマに指導を受け、明治四十三年にスキーマ指導のため日本に派遣された。そして、新潟県高田の第十三師団と旭川の第七師団でスキーマを指導し、大正元年に帰国した。

旭川での滞在は明治四十五年二月六日から九月四日までで、スキーマの講習は二月二十二日から三月二十七日まで三週間行われた。

その、三年後の大正二年の二月八日付小樽新聞、同十八日付北海タイムス紙上に留萌町のスキーマについての記事が見られるのである。これを要約すると、留萌町の伊佐津鉄板店にてスキーマの製造販売を始めたこともあつて同好者が増加しつつありと。同町は街の近くに多くの傾斜地があり、スキーマ滑走するのに好適の地なり。同町の伊佐津和平、畑惣之助、和泉真氏等十余名は

川諒一、加藤鬼頭大の両氏十一日午前七時旭川を發し恵比島駅にて汽車を乗り捨て、天塩石狩の国境を踏越え、午後五時留萌町に到達せるが、十二日より留萌同好者と合同の上正覺寺付近の丘陵を滑走終日練習頗る壯觀なりし（支局報）。

昨日毎日のように南山手通り旧龜本座裏手の丘陵に於てスキーマを練習しているが、町内にスキーマの本場新潟県直江津の田中スキーマを移入販売する店もあつて同好者日毎に増加するので近く留萌スキーマ倶楽部を組織する計画なりと。

また、同年三月十九日付北海タイムスには、留萌のスキーマと題して次のような記事がみられる。

旭川でのレルヒ中佐のスキーマ講座には第七師団の將校とともに旭川郵便局の職員、札幌通信局の職員、それに取材の小樽新聞の記者などを含め総勢二十五名であつた。そして、この人たちはレルヒ中佐が旭川を去つてからもスキーマの普及に努めたらしく、毎年講習会を開いたという。そのなかに留萌の伊佐津和平氏等の顔があつたのは間違いないことであらう。

北海道スキーマ倶楽部より矢

この當時は、締具はまだアルペン用具（リリエンフェルト式）で、ストックは単杖（二本）であつた。伊佐津氏

は日頃の練習のかいあつて、単身旭川の大会に出場し、見た事優勝したほどだったという。また、スキーマの金具を独自に改良し「イサツ製」という金具も造つたほどであつた。

その後、大正十年代にはいとストックが二本のノルウエー式のスキーマが一般化した。ただ技術的には我流のアルペンスキーが一般的であつた。留萌におけるスキーマの導入が日本のなかでも早かつたことは進取の氣性に富んでいた當時の留萌人の心意氣を感じさせる。



昭和初期のスキーマ風景